様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３１ 年　 ４ 月 １２ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６６８２

研究課題名（和文）現代時間論における現在主義の理論的基礎とその展開

研究課題名（英文）A Theory of Presentism and Its Possibility

研究代表者
佐金　武（Sakon, Takeshi）

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：４０７５５７０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、我々の思考の基本的枠組みをなす時間概念を多角的に解明することにある。この目的のもと、3年間にわたる研究期間を通して、すべては現在にある(現在のみが存在する)と主張するいわゆる「現在主義」の立場に基づき、多くの先行研究を踏まえその理論的基礎をさらに明らかにするとともに、関連する様々な応用的問題にも発展しうる広がりのある考察を行うことを試みた。結果、本研究を通じて現在主義のより深い理解が得られただけでなく、時間の経過や時間と様相の関わり、タイムトラベルといった重要な問いに対しても、今後の研究につながる新たな見通しが得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の特色と意義は、時間にまつわる様々な問題を現在主義という一定のパースペクティブに基づき体系的に扱うことにある。こうした試みは国内の研究において他に類を見ない。海外においてはここ数十年、現在主義をめぐって激しい議論が戦わされているところであるが、その過程で旧来の重要な考察が見落とされがちであり、現在主義の根本思想を体系的に考察する視点もやや欠けているように見える。こうした状況を踏まえると、本格的な哲学的時間論としての本研究の意義は大きいといえる。また、社会一般に対しても、時間というもっとも基礎的な概念についての知的関心を喚起し、世界観の根本的転換を迫る可能性を秘めていると期待される。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to clarify the notion of time which constitutes our basic understanding of the world. For this purpose, the project has searched for a theoretical foundation of presentism (i.e. the thesis that everything is present) and tries to develop its philosophical implications in relevant subject areas. This study has many fruitful results, contributing to deeper understanding of presentism itself and offering a new prospect for future research.

研究分野：現代形而上学

キーワード：哲学的時間論　現在主義　トリビアリティ反論　時間と空間のアナロジー　時間の経過　時間の空間化　タイムトラベル

１．研究開始当初の背景

McTaggart［1908］を起源とする現代の哲学的時間論では、次のような時間の二分法が前提とされている。一つは、過去（かつて～だった）・現在（今～である）・未来（やがて～だろう）という時制的な区別に基づく A-系列の時間である。もう一つは、出来事間の前後（または同時）関係に基づく、時制的な区別を全く含まない B-系列の時間である。A-系列を時間の本質的な側面と見なす立場は一般に時制理論と呼ばれ、過去・現在・未来のリアルな差異を何らかの仕方で主張し、本当の変化（いわゆる「時間の流れ」）が時間にとってもっとも基礎と考える。他方、B-系列を時間の基礎とみなす立場は無時制理論と呼ばれ、A-系列は我々の主観的な時間把握にすぎず、過去・現在・未来の区別は無時制的な出来事間の前後関係に還元可能と主張するとともに、本当の変化なるものの実在性を否定する。

しかしながら、近年の論争状況は錯綜しており、時制理論と無時制理論という単純な二項対立で捉えることはできない。とりわけ、時制理論は一枚岩ではなく、複数の対抗理論が競合する、それ自体一つの論争の場であることが明らかになった。少なくとも三つの相反する立場がある。一つ目は、現在のみが存在する（すべては現在にある）と主張する現在主義である。二つ目は、過去と現在は等しく存在するが、未来は無であると考えるオープン・フューチャー理論（あるいは成長ブロック説）である。さらに、現在は完全に存在するが、過去や未来は現在からの遠さに比例して存在の度合いが弱くなるとする現在の程度説もある。三つの時制理論はこのように、時間に関して互いに相容れない存在論を立てている。

これらの立場のうち私はこれまで一貫して、現在主義に基づく時間の本性の解明を試みてきた。現在主義はしばしば存在論の節減（存在するものは少ない方がよい）の観点から動機づけられる。だがこれまでの研究により、このアプローチには、時間にとって本質的と思われるいくつの特徴をもっとも自然な形で明晰化することができるという、他の理論にはない別の大きな利点があることもあきらかとなった。具体的には、（i）過去や未来に対する現在の（存在論的な）特別さ、（ii）時間の経過にとって本質的な変化の可能性、（iii）過去と未来の時間の非対称性といった、時間の様々な特徴を現在主義は有意味に扱うことができる。他方、問題もある。現在主義は非常に倹約的な存在論を打ち出すため、過去と未来の存在を仮定することなく、過去言明や未来言明の真理をいかにして説明することができるかという「トゥルスメイカーの問題」に直面する。さらに、相対論をはじめとする科学理論との両立可能性も問題となる。加えて、現在主義が我々の意識の時間的なあり方を正しく捉えているかどうかも検討する必要がある。本研究では、これら多くの検討課題のうち、これまでの研究成果を踏まえつつ、現在主義の理論的基礎についてさらに深く検討を行った。

――― 引用文献 ―――

［1］McTaggart, J. M. E. (1908) “The Unreality of Time”, *Mind* 17:457-84.

２．研究の目的

時間は、我々の思考の枠組みをなすもっとも基本的な概念の一つである。にもかかわらず、我々はそれを本当に理解しているとはいえない。第一に、時間という概念はそれ自体、実に曖昧模糊としている。たとえば、現在の特別さや時間特有の移り変わり、過去と未来の非対称性についての様々な語りを、我々はどのように理解するべきか。第二に、現代の物理学が明らかにする時間の本性と常識的見解の間には、看過できない隔たりがあるように思われる。こうした乖離に我々はいかに対処するべきか。第三に、時間という概念には広い適用可能性があり、多くの哲学的問題に様々な含意をもつ。たとえば、変化と持続（特に通時的な人の同一性）、自由と道徳的責任、タイムトラベルの可能性などの問題を考えるうえで時間概念の明晰化は不可欠である。本研究では、これらの問題に取り組むための一つの視座として現在主義に着目し、その理論的基礎を確立するとともに、新たな展開を探ることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は時間の本性に関する基礎的探求であり、現代のいわゆる分析哲学の特徴とされる論理的手法にしたがって行われた。その際、現在主義にまつわる大きく 3 つの問題の検討を通じて、本研究の遂行を試みた。より具体的には、下記の研究課題を主たるテーマとした。

【研究 1：トリビアリティ反論への応答とその後の展開】

研究 1 においては、Meyer［2005］らによって指摘された「トリビアリティ反論」を取り上げた。それによれば、現在主義はトリビアルに真か明らかに偽かのいずれかである。現在主義が今存在するものは現在にあると述べているならば、それはトリビアルに真であり、かつて存在したものや今存在するもの、あるいはこれから存在するものが現在にあると述べているならば、それは明らかに偽である。この根本的批判に対する自らの応答［Sakon 2015a］にもとづき、現在主義とは何かについてさらに丹念な明晰化を試みた。

【研究 2：現在主義に基づく様相の統一的理解】

研究 2 では、時点を命題の集合などの抽象物によって代用する代用主義（ersatzism）の立場に基づき、現在主義の理論化を試みた。従来、代用主義的な現在主義は、様相の哲学における代用主義的な現実主義（可能世界を命題の集合などの抽象物によって代用する立場）と類比的な理論として提示されることが多かった。これに対して本研究ではむしろ、現在主義をスタート地点として、様相（可能世界の存在論的身分）を体系的に理解しうることを示唆した。す

でに刊行済みの研究成果［Sakon 2015b］をもとに、それを発展させる形で、哲学的時間論と様相の哲学の接続を図った。さらに、様相と時間の重要な接点として、現在主義におけるタイムトラベルの可能性についても考察を行った。

【研究 3：時間の経過という考えの擁護】

研究 3 では、Olson［2009］らの議論によって近年再び脚光を浴びている、時間の経過という考えに対する次の批判への応答を試みた。それによれば、(i)「時間が過ぎる」という表現を文字通りに受け止めるなら、「それはどのくらいの速さで経過するか」という問いに対する有意味な答えが存在しなければならない。だが、(ii) その問いに対する有意味な答えは存在せず、それゆえ、(iii) 時間の経過という考えは神話である。本研究ではこの問題の解消を目指し、現在主義（およびダイナミックな時間論一般）の擁護に努めた。

以上 3 つの課題に対する取り組みを通じて、現在主義の理論的基礎を確かなものとするとともに、変化の次元としての時間というアイデアの明確化を目指した。実際の研究においては、学会発表や国内外の研究者との交流を行い、可能な限り問題を多角的に検討した。各種学術誌へも積極的に投稿し、そこでのフィードバックをもとに研究のクオリティ向上に努めた。そのなかにはすでに刊行済みのものもあるが、目下執筆準備中、または査読中のものも含まれる。

――― 引用文献 ―――

［1］Meyer, U. (2005) “The Presentist’s Dilemma”, *Philosophical Studies* 122: 213-25.［2］Olson, E. T. (2009) “The Rate of Time’s Passage”, *Analysis* 69: 3-9. ［3］Sakon, T. (2015a) “Presentism and the Triviality Objection”, *Philosophia* 43: 1089-1109.［4］Sakon, T. (2015b) “A Presentist Approach to (Ersatz) Possible Worlds”, *Acta Analytica* 31: 169-177.

４．研究成果

本プロジェクトはこれまでの研究成果にもとづき、それをさらに発展させる形で行われた。実際のプロセスには様々な紆余曲折があったものの、今後の研究にもつながる多くの有意義な成果が得られた。また、このプロジェクトのおかげで、過去に刊行された研究成果にも一定の世界的な注目が集まったことは大変大きな成果であった。以下、先に提示した 3 つの研究課題に関して、具体的にどのような展開があったかを明らかにする。

【研究 1】

トリビアリティ反論は現在主義の定義に関わる根本的な批判である。それゆえ、この批判について深く検討することは、現在主義とは時間に関するどのような理論であるか（あるいは、どのような理論であるべきか）を原点に立ち戻って考察することでもある。このことが契機となって、現在主義の新たな理解に向けた、まったく別のアプローチがありうることに気づくに至った。この着想は 2019 年度基盤研究（B）「現代時間論の新展開：現在主義と「時間の空間化」の是非をめぐって」につながるものであり、今後は現在主義のみならずその対抗理論も含めあらゆる可能性を射程におさめつつ、時間の空間化を新たなキーワードとして、様々な哲学的時間論を広く比較検討する予定である。さらに、プロジェクト期間中に行なった学会発表や関連論文の刊行により、それまでの研究成果に注目が集まったことも大きな成果である。とりわけ、トリビアリティ反論に関する拙論［Sakon 2015a］には、一定の世界的なインパクトがあることが認められる（https://philpapers.org/rec/SAKPAT-2）。

【研究 2】

時間と様相の結びつきは通常考えられているよりもずっと強い。このような洞察にもとづき研究 2 では、しばしば様相とのアナロジーを通じて解釈されがちな現在主義の主張をさらにラディカルに推し進め、様相はむしろ時間の一つの側面として理解可能であることを論じた。プロジェクト期間中の活動が功を奏し、過去の研究成果にも注目が集まっていることはよろこばしい（https://philpapers.org/rec/SAKAPA）。また、時間と様相をめぐる応用問題の一つとして、現在主義とタイムトラベルの両立（不）可能性という大きな問題もある。これについては、学会発表等を通じて継続的に研究成果の発信を行い、さらなる議論の喚起に努めているところである。本研究に関わるすでに刊行された成果として共著論文 1 件［Kim and Sakon 2017］があり、目下執筆準備中、または査読中の論文もある。

【研究 3】

時間の経過をどのように考えるかについて、様々な時間論の立場は大きく異なる。オーソドックスな現在主義の考えは、時間の経過とは実在するものの変化の比喩表現にすぎないというものである。この考えにもとづき、Olson らの「時間の経過のはやさをめぐる問題」への対処を試みた。その詳細は拙論［Sakon 2016］のなかで明らかにされている。この研究 3 は、研究 1 と 2 とも有機的に関係している。時間の経過は現在主義の根幹をなす基本的な要素であり、時間の空間化を含意するタイムトラベルの可能性とは相容れない。この結論は、控えめにいっても、賛否両論、様々な反応を喚起するものであり、今後もこの議論を継続する形で本研究をさらに発展させるつもりである。

――― 引用文献 ―――

［1］Kim, S. and Sakon, T. (2017) “Instantaneous Temporal Parts and Time Travel”, *Korean Journal of Logic* 20: 113-141. ［2］Sakon, T. (2016) “Time without Rate”, *Philosophical Papers* 45: 471-496.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）
［1］Kim, S. and Sakon, T. (2017) “Instantaneous Temporal Parts and Time Travel”, *Korean Journal of Logic* 20: 113-141.
［2］ Sakon, T. (2016) “Time without Rate”, *Philosophical Papers* 45: 471-496.

〔学会発表〕（計　3　件）
［1］ Sakon, T. (2018) “Presentism and Spatialisation of Time”, The First International Workshop on Time, Osaka City University, 4 Oct. 2018.
［2］Sakon, T. (2017) “Presentists Shouldn’t Believe in Time Travel”, The First Tokyo-Milan Workshop on Time, The University of Tokyo, 28 Nov. 2017.
［3］ 佐金武 (2016) 「タイムトラベルと現在主義」（招待講演），（シンポジウム）「現在」という謎：時間の空間化とその批判，九州大学 QR プログラム「現代物理学における時間論の哲学的解釈」，立正大学（品川キャンパス）, 2016 年 12 月 18 日.

〔図書〕（計　1　件）
［1］ 佐金武 (2017) 「現象的時間と自己」，信原幸弘・編著，『時間・自己・物語』収録，春秋社.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
下記の個人ホームページ上に、これまでの一部業績のリストと、本研究に関連するイベント情報を掲載している。
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/sakon/index.html
これまでに刊行された研究論文のインパクトについては下記を参照。
https://philpapers.org/s/takeshi%20sakon

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。